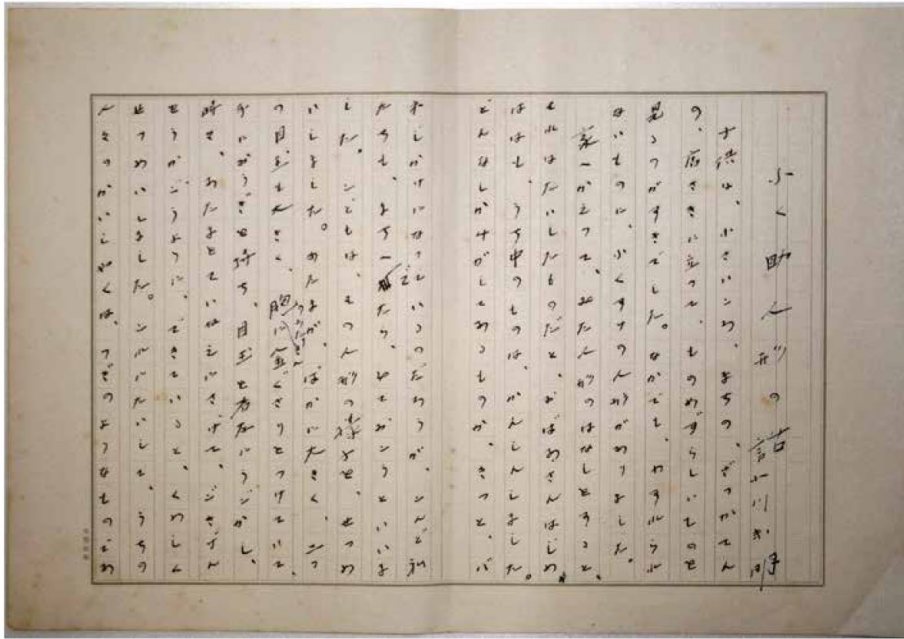


最晩年に書かれた童話原稿「ふく助人形の話」



当館では、小川未明のご遺族から、貴重な未明の生原稿を多数お預かりしています。「ふく助人形の話」が書かれた原稿もその一つです。この童話は昭和32年(1957)5月、「日本児童文学」に発表されました。短編童話としては、未明の最晩年に書かれたものと推測されます。

未明が最初の童話集『おとぎばなし集 赤い船』を刊行したのは明治43年(1910)12月です。当時、未明は28歳でした。この本に収録された童話の執筆時期は、童話集に収録されなかった習作童話

を含め、明治38年(1905)～39年頃にさかのぼるものと思われま。その後、未明は約50年間、約1200編の童話を書き続けます。「ふく助人形の話」が発表されたのは、未明75歳のときでした。

「ふく助人形の話」は、400字詰原稿用紙(文房堂製)5枚にわたって細字の万年筆、ブルーブラックのインクで書かれています。大きな修正はなく、ひらがなを多用し、全体が書き上げられたあと、修飾語句や敬語表現を書き加えるなどして、言葉づかひの吟味をしています。書きながら、あるいは書いた直後に未明自身が手入れをしたものと思われま。 (他に数箇所、未明の筆跡とは異なる鉛筆書きの修正も確認されま。)

「ふく助人形の話」のストーリーを紹介しま。子供は、町で見かけたばね仕掛けのふく助人形の話、家に帰って母とおばあさんにしま。母やおばあさんは、ふく助人形のおかげで、その店はますます繁盛するだろうと言いま。おばあさんは、どうして金もうけをしようかと考えるあまり、頭が重くなり、自由に動けなくなった人がふく助だと説明しま。母も、あの店は金貸しをし、困っている人を苦しめ、それで財産を築いたのだと説明しま。それ以来、子供たちには、町のふく助人形が、ごうまんそうに見えま。ある晩台風がきて、ふく助人形はこわれ、その後、雑貨店も姿を消したという話です。

この童話は、苦勞と苦心でやがて成功し、金持ちになるという話ではありません。昭和30年(1955)には日本の高度経済成長期が始まろうとしていま。もはや戦後ではない、懸命に働けば金がもうかる時代がやってきつつありま。しかし、未明は困った人を苦しめ、人のうらみをかけてまで金もうけをする人を「人間のすることでない」と斬って捨てま。ふく助人形は、そうした人間の欲望の象徴として登場しま。

もう一つ、この童話には、注目される点がありま。登場する子供は、小さいころの忘れられない思い出として、ふく助人形の話をしま。したがって、この子供は、未明自身の子供時代、子供の母やおばあさんは、未明の母やおばあさんとも考えられま。母やおばあさんから教えられたことを、未明は生涯、大切に自分の考えの基とし、童話を書き続けたのです。

「ふく助人形の話」が発表された前年11月、未明が少年時代を過ごした春日山に詩碑が建てられま。詩碑には「雲の如く高くくものごとくかがやき雲のごとくとらわれず」の文字が刻まれていま。未明は、この詩碑の除幕式に足の不自由な体をおして出席しま。なつかしい郷里の思い出が、この童話に投影されていま。